

蕪村晩年の発句における趣向

——「桜なきもろこしかけてけふの月」考——

はじめに

清 登 典 子

平明な叙景句と見える蕪村発句の中に、古典世界を踏まえた趣向が隠されているもののあることについては、すでにいくつかの発句を例にして明らかにしてきたところである。^{〔1〕}こうした蕪村発句の手法は、地方系蕉門の重視する平明性と都市系俳壇の重視する趣向性との統合という中興期俳諧の課題に対する蕪村なりの解答として見られることもできるだろう。そして、一見すると平明な叙景句と見える句を作ることは、蕉風俳諧中興運動の担い手達の大多数を占めていた地方系蕉門出身俳人たちとの交流を深め、夜半亭一門がその運動の担い手の一員として認められていくためにも有効に作用したものと考えられる。

しかし、すでに指摘したことであるが、晩年の蕪村は、安永六年刊の『夜半楽』や天明二年刊の『花鳥篇』などの私的編集書において、江戸俳諧を積極的に評価するようになり、同時に書簡類中においては当時流行の俳風に反発し、意識的にそれとは異なる俳風の発句を作ろうとする姿勢を見せるようになっていく。特に書簡類中に散見されるこのような志向は尾形仍氏によって「蕪村晩年の志向」と名付けられてもいる。^{〔2〕}やはりこれもすでに指摘したことであるが、この江戸俳諧に対する積極的な評価の姿勢と「蕪村晩年の志向」とは密接に関係してい

ると考えられる。すなわち、当時俳壇の主流を占めていた地方系蕪門俳人たちが一致して実景、実感に基づく平明な景気句（叙景句）を推進したことで、俳壇がこうした俳風一色に染められつつあることに對する蕪村の不満の思いが、それとは対極にある趣向性の強い江戸俳諧への評価と結びついたりと考えられるからである。

したがって、こうした晩年の志向に基づく発句においては、地方系蕪門の重視する平明性よりも都市系俳諧の重視する趣向性に重きの置かれた句作りがなされたであろうことが予想される。その際、重視されることになった趣向自体の在り方にも何らかの変化が見られるようになるのであろうか。

本稿では、蕪村晩年の志向を受けて作られた発句として「桜なきもろこしかけてけふの月」の句を取りあげ、そこに見られる平明性と趣向性との関係を確認した上で、一句における趣向のあり方に注目し、検討を加えることとしたい。

作句年次と作句事情

先に、この句の作句年次と作句事情を押さえることで、晩年の志向との関わりを明らかにしておきたい。まず、作句年次については、天明三（一七八三）年という、まさに蕪村の最晩年の句であることが推定されている。その根拠となるのは、九月一日付の月溪宛蕪村書簡である。この句を記した同書簡中に「今日はこれこまへ追悼のはいかい二只今より罷まかりこし候」とあり、この「追悼のはいかい」を、明和八（一七七二）年十二月七日に四十五歳で没した蕪村門の重鎮俳人、黒柳召波の十三回忌追悼の俳諧と取り、それを召波の息子である「これこま（維駒）」が催したものと考えると、書簡の出された年次は天明三（一七八三）年と推定されるからである。この他にも、八月十九日付佳棠宛、八月二十日付騏道宛、八月二十二日付如瑟宛のそれぞれの蕪村書簡にこの句が記されているが、これらの書簡もすべて天明三年に出されたものと推定されている。なお、書簡以外でこの句を記すものとしては、現在のところ蕪村自筆の扇面一点があるのみであり、蕪村関係の句稿類や自筆句帳、また『蕪村

句集』『蕪村遺稿』などの句集類にも入集はみられない。句集類への入集としては、蕪村没後に刊行された寛政六（一七九四）年序の『雁風呂』と同十二年刊の『新五子稿』に見られるのみである。

次にこの句の作句事情であるが、これについては、前出の八月十九日付佳棠宛蕪村書簡において「月の小すり物いたし度候」と述べ、「如瑟、佳棠、百池、蕪村、右四人之句にて、早々すらせ申度候」とした上で、「桜なきもろこしかけてけふの月」の句を記し「右の句を出し申度候」と書き添えていることから、天明三年に企画した俳諧の刷り物用の句として作られたものということがわかる。ただし、ここで企画されている「月の小すり物」はその実物が見つかっておらず、果たしてこの企画が実現したかどうかは、現在のところ不明である。

この句と晩年の志向との関係で注目されるのは如瑟宛や月溪宛書簡において、この句について蕪村自身が次のような注記をしていることである。まず如瑟宛書簡では

此の句法は当時流行の蕉風にてはなく候。近來の蕉風といふ物、多くあやなし候句斗いたし、俗耳をおどろかし候。実はまぎれ物に候故、わざとケ様の句をいたし置候。

と述べる。また、月溪宛書簡では

近年蕉門といふてやかましき輩、いづれもまぎらかしの句のみいたし候て、片はらいたき事に候。それ故愚老は右の様成句をわざといたし候。

と記している。どちらの書簡においても、最近「蕉風」として流行している俳風がまやかしの物であるので、わざとそれとは異なる句として詠んだのが「桜なき」の句である、と述べている。ここに見られる「当時流行の蕉風」への嫌悪感と、それとは異なる俳風の句を意識的に作ろうとする姿勢とは、まさに「晩年の志向」と呼ばれるものであり、「桜なき」の発句が蕪村晩年の志向に基づいて作られた句であることは明らかと言えるであろう。

では、晩年の志向に基づいて作られたこの「桜なきもろこしかけてけふの月」の発句における平明性と趣向性との関係はどうなっているだろうか。先に、晩年の志向に基づく発句においては平明性よりも趣向性に重きが置かれているはずであると予想したが、この句はまさにその予想通りの句であると言えよう。何よりも、この句が

実景に基づく平明な叙景句でないことは一読、ただちに了解されるところである。その代わりとして、一句を覆っているのが、作者の意、作意に基づく趣向性の強さである。その趣向性の強さを集約的に示すのが、句中の「桜なきもろこし」および「もろこしかけて」の二つの表現であると言える。これらの表現からは作者による日本と中国との対比的な把握や、中国と日本とにまたがった壮大な発想、想像力など、作者主体の強い関わりが窺えるからである。

以下、「桜なき」の発句の趣向に関して、「桜なきもろこし」と「もろこしかけて」という二つの表現に注目し、一つずつ検討を加えて行くことにする。

「桜なきもろこし」の表現

「桜なきもろこし」という表現とそこに込められた趣向の在り方について考える時、まず注意したいのは、この句が全体としては「けふの月」を季語とする秋の名月の句であるということである。すなわち、この句では自然美の代表の一つである「月」のみではなく「桜（花）」までもが詠み込まれているのだが、それでいながら多くを盛り込み過ぎて季節や焦点がぼやけた句となることなく、すつきりとまとまった印象の句となっているのは、「桜」に関しては、「桜なき中国」対「桜のある日本」という中国と日本との明確な対比を示す材料として用いられているのに対し、「月」に関しては、こうした「桜」に関しては違いのある日中兩國を分け隔てることなく照らしていると詠んで、句に最終的な統一感を与えるような扱いがされているからであろう。ここには、先に違いを際立たせた上で、後からその違いを超える存在を提示する、という表現上の構成を見ることができるのであり、ここからも「桜なき」の発句が実景に基づく叙景句とは一線を画した、知的な構成句であることが明らかであると言える。

さらに、秋の名月の句でありながら、「桜」という春の季語で一句が始まる点にも作者の意図、趣向が見てと

れる。

まず、読者の側に立って考えてみると、「桜なきもろこし」という表現は「桜がない」という否定表現によって中国を捉えたものであり、中国に何かがある状態が表現されているわけではないので、これだけではどのようなイメージも脳裏に浮かべがたい表現と思われるのだが、実は否定されることでかえって「桜」が強く意識され、そこに焦点が絞られる効果もたらされていると見ることが出来る。おそらく多くの場合、読者はこの表現からその背後に隠されている「桜ある日本」という意味を汲み取り、まず日本における満開の桜の情景を脳裏に思い描いたのち、それと対比させる形で、桜の景を持たぬ中国を想像することになるのではないだろうか。一度桜の景を想像した後に、それを消し去るということは、最初から何もない状態を想像するのは大きく異なるものである。その結果、一句で詠まれているのは月の景観でありながら、そこに桜花の残像がたゆたい、一句に一種の華やぎを添える効果を挙げていると思われる。こうした蕪村の否定表現の巧みさについては堀切実氏の論考¹に詳しいが、この句においても否定表現が効果的に用いられていると言えよう。

さらに「桜」が春の季語である、ということに注目すれば、名月の句であるにも関わらず、春の季語から一句が始まるということは、読者にある種のとまどいや意外性をもたらすことが予想される。これについては、すでに拙稿⁵においても提示した、読者の意表を突く他季季重なり表現の技巧性、として捉えることができるだろう。そして技巧性誇示の側面を持つ他季季重なり句が江戸俳諧などの都市系俳諧において多く作られるものであったことにも注意したい。近來の蕉門の句に対する嫌悪感から「わざと」作られた句であるからこそ、江戸俳諧の技法をこうした形で積極的に取り入れていたと考えられるからである。

なお、この「桜なきもろこし」という中国についての知識についても述べておきたい。実はこれは誤った知識であったことが斎藤正二氏や今橋理子氏らによって指摘されている。今橋氏によればこの誤った認識の発端は、博物学者貝原益軒が元禄十一年刊の『花譜』⁶において

花はいにしへより、日本にて第一賞する花なり。(中略)文選の詩に、山桜は果の名、花朱、色火のごとし、

とあれば、日本の桜にはあらず。からのふみに、日本の桜のごとくなるはいまだみず。長崎にて、から人にたづねしも、なしとこたふ。朝鮮にはありといふ。

と述べたことに求められる、という。益軒が桜の有無を尋ねた中国人が、たまたま中国奥地に桜の自生地があることを知らなかったために、中国には桜がないと答えてしまったことからこうした記述がなされたのであるが、よく読めばこの文全体としては、桜が中国にはないが朝鮮にはある、と人から聞いた国ごとの桜の有無を述べているのにすぎないのがわかる。ところが、ここに記された「桜は中国にはない」という記述が一人歩きをし、やがて「桜は大陸にはない」という説になり、ついには「桜は異国にはない、日本固有の花である」という誤った通説へと発展していくことになる。そして、この誤った通説は、当時巷に大量に流布した博物書によってさらに増幅され広がっていくとともに、国学者たちによって皇国のシンボルとしての桜という思想が生み出される根柢ともなり、賀茂真淵の「もろこしの人に見せばやみ吉野の吉野の山の山さくらばな」の和歌や、本居宣長の「敷島の大和心を人問はば朝日にほふ山桜花」の和歌表現へとつながっていくことになった、というのである。

蕪村の「桜なき」の発句も、まさにこうした「中国にはなく、日本にはある桜」という当時広く流布していた通説を大胆に生かした作品であったのである。

「唐土かけて」の発想

「桜なき」の発句が評価されるとき、その中心となるのがこの「もろこしかけて」の表現である。とくに、日中兩國を照らす月光を想定するというスケールの大きな発想の在り方が注目を集めてきている。たとえば清水孝之氏は「唐土かけて」⁽⁷⁾などとは蕪村ならではの発想であろう」と評し、その発想を蕪村独自のものと捉え、高い評価を与えている。

しかし、このような発想や表現は本当に蕪村独自のものなのであろうか。講談社版『蕪村全集』発句篇の頭注

には藤原俊成の「今日といへばもろこしまでも行く春を都にのみと思ひけるかな」(『新古今集』)の和歌が挙げられているが、この一首のみに留まらず、中国と日本とを対比しながら、あるいは両国にまたがる景を想定しながら、ある情景なり情趣なりを表現することは、和歌においても古くから見られる発想パターンの一つであったと言える。

そのことを何よりも明白に示すのが、ほかならぬこの「もろこしかけて」の表現であろう。というのも、実はこの表現自体が、和歌表現から取られたものであったことを指摘できるからである。その和歌とは『新勅撰集』に載る源家長の「いづくにもふりさけ今やみかさ山もろこしかけて出る月影」である。一首は「いづくにおいても振り仰いで空を眺めよ、今三笠山からはその光が日本のみならず中国をも照らす月が出るところであるよ」と詠んだものであり、「もろこしかけて」の語句によって日中兩國にわたる月の出を詠んだ歌となっている。

さらにこの和歌は、「ふりさけ」「三笠山」の語からだちに知られるように、百人一首にも選ばれている阿倍仲麻呂の和歌「あまのはらふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも」を踏まえて詠まれたものである。したがって「いづくにもふりさけ」という詠み出しの部分には、仲麻呂の「あまのはらふりさけ見れば」の語句を踏まえた上で、日本はもちろん、仲麻呂のように中国にいたとしても空を振り仰ぎ、日中兩國を照らす月を眺めよ、との思いが込められていると考えられる。

蕪村にとつて、この「もろこしかけて」の表現を用いることには二つの魅力があったと考えられる。一つは、言うまでもなく「もろこしかけて」が、わずか七文字でありながら日本から中国にかけてという大きなスケールを示すことができる簡潔にして卓抜な表現であるということであり、和歌よりもさらに短い詩形である俳諧の発句において、この表現が効果的に使えるということである。もう一つは、この和歌が踏まえる阿倍仲麻呂の和歌および伝説を句の背後の世界として取り入れることができる、ということである。

この後者の点についても少し説明すると、仲麻呂の和歌とそれに関わる伝説とは、蕪村の愛好する古典的故事の一つであった。そのことは「仲丸の魂祭せむけの月」や拙稿⁹⁾においても取りあげた「山の端や海を離る、

月も今」など、名月の句において仲麻呂伝説を踏まえた作品がいくつか作られていることに見て取れるばかりでなく、「唐人よこの花過ぎて後の月」「月に漕ぎ呉人はしらじあめの魚」など日本と中国とを対比して捉えようとする作品の視点にも影響を与えたものと考えられる。というのも、さきほど、中国と日本とを対比しながら、あるいは両国にまたがる景を想定しながら詩歌表現を行うことは、和歌においてもよく見られる発想パターンの一つであったと述べたが、仲麻呂の「あまのはら」の和歌こそその先蹤と呼べるものであったからである。蕪村が仲麻呂の和歌とその伝説とを愛好したのも、中国に学んだ文人の先輩としての仲麻呂の存在にあこがれるとともに、その和歌に見られる日中両国にわたる発想を十八世紀日本の文人たちとも共通するものと認識し共感したためと考えられる。

しかし、ここで注意したいのは仲麻呂の故事や和歌を踏まえていることが「桜なき」の句において表だつては示されておらず、またそうした知識がなければ作品の解釈ができない、というような句の作り方もされてはいないということである。

すなわち「もろこしかけて」の表現が仲麻呂の故事を踏まえて作られた家長の和歌「いづくにもふりさけ今や三笠山もろこしかけて出る月影」から取られていることを知らなくとも「日本から中国にかけて」の意と取ることで、「日本のように春の桜の咲き誇る景観は見られない中国であるが、十五夜の清光は日本から中国にかけてあまねく照りわたることであるよ」という解釈をすることは十分に可能である。その場合にも花月の風流の日中における対比が詠まれている点で十分趣向性のある句として鑑賞することができる。さらに、もし読者が「もろこしかけて」について仲麻呂の故事を踏まえた和歌表現に基づく表現であることを知っていた場合には、一句の背後に仲麻呂の故事に基づく古典世界が広がっていることを読みとり、「かつて中国での月の出を眺めながら日本の三笠の山の月を偲んだ仲麻呂も桜のない中国では花見を楽しむことはできなかったに違いない。しかし今宵日本の三笠の山から出た名月は、日本から中国にかけてあまねく照りわたり、仲麻呂が振り仰いだように日中国のどこにおいても人々はその清光を同じように仰いでいることであるよ」というような解釈が可能であろう。

この場合には先に挙げた花月の風流の日中の対比という趣向のみならず、仲麻呂の故事の世界を踏まえるという趣向が加わることで、読みの世界に時空の広がりをもたらされ、さらに一層の趣向性ある句としての鑑賞がなされると言えらるう。

実は、江戸俳人たちの発句作品にも故事、古典に基づく句作りは広く見られるものであるのだが、その場合の特色は、蕪村の場合とは異なり、故事、古典の知識がなければ一句の意味が取れないというものがほとんどであった。¹⁰蕪村発句においては、これまで検討を加えた句においてもそうした故事、古典の知識に基づく句作りは避けられており、一見すると平明な叙景句と見える句の背後に古典世界を踏まえるという趣向が隠されていた。今回検討を加えた晩年の発句である「桜なき」の句の場合には、一見して趣向性ある句であったのだが、ここでも明示された趣向の背後にさらに古典世界を踏まえるという趣向が隠されていたことになる。江戸俳諧を積極的に評価する晩年の発句においても蕪村は江戸俳諧のやり方をそのまま踏襲して古典の知識に基づいた句作りをしたのではなかった。蕪村にとつての古典摂取はあくまでも古典や故事を取り巻く歴史的な空間を一句の趣向として句の背後に取り込み、想像力を自在に飛翔させる場を確保することにその主眼が置かれていたと見ることができらるう。そして、それは誰にでも開かれた世界だったのではなく、蕪村と同等の教養ある読み手のみみかたれている世界だったのである。

「みよしのや」の句との比較

さて、蕪村は「桜なき」の発句を作った天明三年より十五年前にあたる明和五年にすでに同じ「もろこしかけて」の語を用いた「みよしのやもろこしかけて冬木立」の発句を作っている。ここでは、これまでの検討で明らかとなった「もろこしかけて」の意味を踏まえた上で明和五年の「みよしのや」の句についても解釈を見直すとともに、同じ語句を用いた「桜なき」の発句が十五年ぶりにふたたび作られたことの意味についても考察してみ

ることにしたい。

まず明和五年に作られた「みよしのやもろこしかけて冬木立」の句についての解釈だが、従来の解では指摘されていないものの、この発句もまた「桜なき唐土」という当時の中国にまつわる通説を踏まえて作られた句であると考えられる。一句は表面上は吉野の冬木立の立ち並ぶ景観がもろこしまでも続いていくと詠じるのみだが、実はその裏に、春の花の頃であればここ日本の吉野は桜の情景となるのに対して桜のない中国ではそのような景は見られないだろうが、との意味が込められていると推定されるからである。その推定の根拠となるのが、上五に置かれた「みよしのや」の地名である。わざわざ桜の名所である吉野の地を選んでその冬景色を詠んだところに、桜の有無による春の景観の日本と中国との差異を踏まえた上での冬の景観の提示という趣向が窺えるのではないだろうか。「みよしのや」の語句で始まり「もろこし」の語を続けて置くことで、当時広く知られていた「桜なき中国」という通説が読者に想起されることを期待したのではないかと考えられるのである。

また、この句は明和五年十一月二十四日に召波亭で開催された三菓社句会における兼題「冬木立」によって作られた題詠句であることが知られている。三菓社は明和三年に蕪村、召波、太祇らを中心メンバーとして結成されたものであるが、明和三年の句会は蕪村の画作修行の旅のために二回開催されたのみで中絶しており、明和四年は一年間休会状態で、明和五年の五月からやつと定期的な句会が行われた出たところであった。明和五年十一月は、まさに三菓社句会の実質的な活動開始の時期に当たると捉えていいだろう。そして、この時期の蕪村一派と江戸座俳人との間にかなり活発な交流が行われていたことは、すでに指摘したことがあるが、その交流の中心にいたのが江戸座出身の俳人で、三菓社の主要メンバーでもあった太祇である。三菓社のメンバーには、この太祇や江戸で服部南郭に学んだ漢詩人の召波など、江戸俳諧に親しんだ経験があり、蕪村と同等以上の知識、教養の持ち主である人物が揃っていたのであるから、「みよしのや」の句のような趣向ある句作りが句会における題詠句として作られたことも当然といえる。たとえば、同じ明和五年の十月の句会では、兼題「顔見世」の句として蕪村の「顔見世や蒲団をまくる東山」の句が出されているが、句会の記録である『夏より』には、句の前に

「梅幸は優伎の英雄なり」に始まる長い詞書きが付けられており、その途中には「されば暁の霜に跡つけたる晋子が信にそむき、かの嵐雪が懶にならひて」云々の言葉も見える。これは蕪村の「顔見世や」の句が、晋子（其角）の「顔見せや暁いさむ下邳の圯」の句、および嵐雪の「布団着て寝たる姿や東山」の句を踏まえて、晋子のいさましきではなく嵐雪の懶惰な風情にならつて作つたものであるということ述べたものである。句会においてこうした詞書きが示された訳ではないだろうが、一句が嵐雪の「布団着て」の句を転化したものであることは一座の人々にはすぐに了解されたことであろう。また其角、嵐雪などの江戸俳人の句を踏まえた、こうした軽妙な発句が提出されているところにも、当時の三葉社の雰囲気的一端が浮かび上がるといえるだろう。

やがて、明和七年に夜半亭二世を継承した蕪村は、地方系蕉門出身者が多数をしめる蕉風中興俳人たちの交流を深め、蕉風中興運動の担い手の一員としての夜半亭の地位を俳壇上に確立していく。それと入れ替わるかのように江戸座俳人との交流は減少し、さらに明和八年の太祇、召波の相次ぐ死去などもあり、蕪村周辺からは若き日からなじんでいた江戸俳諧の闊達な雰囲気が次第に失われていくようになるのである。

天明三年、名月の刷り物のための句を案じていた蕪村が、十五年前に太祇、召波とともに一座した三葉社句会における自らの句「みよしのやもろこしかけて冬木立」を思い出し、それをもとにして「桜なき」の句を詠じたのかどうか、それはわからない。しかし、この天明三年は太祇、召波の十三回忌の年に当たっており、蕪村が太祇、召波の人と俳風とを懐かしむ懐古的な心情になつていたことは確実と思われる。また、趣向ある句を意識的に作ろうとしていた晩年の蕪村がかつて使つた事のある趣向を、ふたたび用いようとしたとしても不思議なことではないだろう。

なお、ここで想起されるのは、天明二年に出された蕪村編の春興帖『花鳥篇』所収の「いとによる物ならしくし凡巾いのかほり」を発句とする十二句の一巡連句中に、「ゆく雲のもろこしかけて旅衣」という熊三の付け句が見えていくことである。熊三は夜半亭社中の俳人で凡童の下僕であった人物であり、実際に熊三がこの付け句を作つたすればこの時期の夜半亭周辺において「もろこしかけて」の語句が多少とも知られるものであつたことを証する

ものと言える。また、もし蕪村の代作であったとすれば、この時期の蕪村がかつて用いた「もろこしかけて」の語句を再び句中に生かそうと試みていたことを示す例として受け取ることができるだろう。いずれにしても『花鳥篇』は晩年の蕪村が自らの趣味と趣向を存分に盛り込んで編集した春興帖であり、その連句作品中にこの語句が用いられていることから、「もろこしかけて」の語句が趣向ある表現として意識的に用いられていたことは確実と思われる。

こうして蕪村晩年の趣向ある句への評価の姿勢の中で、十五年前の「みよしのや」の句に用いられたのと同じ表現、同じ趣向を生かした「桜なき」の句が作られたわけである。しかし、二つの句を比較してみると大きく異なる点も目に付く。まず明和五年の「みよしのや」の句では、桜は中国にはないという通説を踏まえての作であることが表だつては示されていない、いわば謎とき仕立ての句であるのに対して、天明三年の「桜なき」の句の方では、最初から「桜なきもろこし」の語によって明確に示されており、趣向が明確でわかりやすい句となっている。また、「みよしのや」の句においては単に日本から中国にかけての意味を表す表現として用いられているに過ぎなかった「もろこしかけて」の語句が、「桜なき」の句においては日中にまたがる月の景に用いられることで、一句の背後に仲麻呂の故事およびそれに基づく和歌表現の世界を重層化させて示すことに成功していると言えるだろう。

「桜なき」の句は「みよしのや」の句の単なる焼き直しではなかったのである。とくにその趣向の用い方、一句の構成の仕方において十五年前の「みよしのや」の句を超えるものであったことが認められるであろう。

まとめ

以上、蕪村晩年の志向に基づいた句として「桜なきもろこしかけてけふの月」の発句を取りあげ、「桜なきもろこし」「もろこしかけて」の二つの表現を中心に、そこに見られる趣向の在り方につき検討を加えた。さらに

同じ趣向や表現の見られる句として明和五年に作られた「みよしのやもろこしかけて冬木立」の発句についても取りあげて、比較検討した。

その結果、「桜なき」の発句が明らかに強い趣向性を見せる句であること、またそこには江戸俳諧から学んだと思われる趣向が用いられていることが明らかとなった。しかし一方で、一句の背後に古典世界を踏まえる趣向は、これまでに検討して来た蕪村発句の場合にもそうであったように、ここでも表面上は示されず、表立った趣向の背後に隠された形で用いられていることを確認することができた。

蕪村晩年の発句は、江戸俳諧評価、趣向の重視という晩年の志向を生かしながらも、決して単なる江戸俳諧、都市俳諧への回帰となることなく、都市俳諧の要素を取り入れつつも、蕪村がそれまでの俳諧活動の中で学んできた俳諧表現の技法を十全に生かしたものとなっていたことが明らかになったと言えるだろう。

注

- (1) 拙稿「蕪村発句の趣向を読む」(『日本文学』平成十二年二月号)、同「蕪村発句と趣向―「乾鮭に腰する市の翁哉」考―」(『芸芸言語研究 芸芸篇』四十号、平成十三年十月) など。
- (2) 拙稿「蕪村と江戸座―京移住後の交渉―」(『連歌俳諧研究』六十二号、昭和五十九年一月)
- (3) 尾形仍氏「解説」(『蕪村自筆句帳』筑摩書房、昭和四十九年) 中に「蕪村晩年の志向」の項目名がある。
- (4) 堀切実氏「蕪村の否定表現」(『文学』昭和五十八年五月、のち「表現としての俳諧」ぺりかん社、昭和六十三年所収)
- (5) 拙稿「蕪村の季重なり表現」(『連歌俳諧研究』九十三号、平成九年八月)
- (6) 斎藤正二氏「花の思想―その相対化のために」(『日本の美学』第三号、ぺりかん社、一九八四年十月)、今橋理子氏「江戸絵画と文学」東京大学出版会、平成十一年
- (7) 清水孝之氏「蕪村・一茶」角川書店、昭和五十一年

- (8) たとえば北村季吟による百人一首注釈書『百人一首拾穂抄』においても「あまのはら」の和歌の参考歌として、この「いづくにも」の歌が挙げられている。あるいは蕪村自身が同書によってこの和歌を知った可能性も考えられるのではないだろうか。さらに検討してみたい。
- (9) 注(1)に挙げた拙稿「蕪村発句の趣向を読む」参照。
- (10) 拙稿「蕪村俳諧の技法と江戸座」(『文学』五十二卷十号、昭和五十九年十月)
- (11) 注(2)に同じ。